

[教育講演 I]

日本の病院史(通史) 編纂から解ってきたこと

福永 肇

金城大学社会福祉学部

○病院の通史

「病院(Hospital)」は疾病患者を収容して治療を行う医療施設である。医療や医師は人類出現の最初の頃から存在していた。しかし病院の登場は意外に新しい。最も古い病院は前5世紀セイロン島にあった「ミヒンテール病院」であるようだ。新しい遺跡・資料の発見がない限り、病院を発明したのはスリランカのシンハラ人になる。日本の病院の嚆矢は、(聖徳太子の四天王寺「療病院」は伝説として)鎌倉時代の鎌倉極楽寺に開設された「桑谷病舎」であろう。

さて日本の病院の歴史(通史)を知ろうと思ったが書籍がなかった。外国語文献でも病院史は稀有で、あっても多くは建築設計史の内容であった。そこで日本の病院を通史の形で整理整頓し、『日本病院史』(ピラールプレス刊、2014年、全466頁)(韓国語版『일본 병원사』후쿠나가 하지메(지은이)|신영전|최선우|이준석|다나카 신이치(옮긴이)|한울(한울아카데미, 2017年、全468頁)を上梓した。編纂を通じて以下のことが解ってきた。

○日本の病院小史

江戸時代まで、医療は基本的に往診スタイルであった。医師が患者宅に出向き、患者の枕元で薬を処方した。患者の診察を行う施設(=診療所)や患者を収容して治療する施設(=病院)は殆どなかった。例外として小石川養生所などがあるが数は少ない。薬屋(漢方)や配置売薬(置き薬)はあった。江戸時代、診療所や病院という医療施設が必要であるという思想は興って来なかった。日本最初の本格的西洋式病院は幕末長崎の幕府立「養生所」(1861年、124床)である。すると日本の病院はたかだか157年の歴史しかない(もっとも殆どの近代設備、社会システムも、登場は幕末・維新以降である)。この157年の期間は大きく①ジャーマン・スタイルの医学・医療・病院の時代(養生所開設~終戦までの84年間)、②アメリカン・スタイルの医学・医療・病院の時代(戦後~現在の74年間)に二分することが出来る。

○日本の医療に影響を与えた国と病院を紹介した外国人医師

日本が医学・薬学・医療制度を学んだ国は時代によって変遷する。古代は朝鮮半島、奈良・平安時代(8~12C)は朝鮮半島と中国(随,唐)、鎌倉時代(12~14C)は中国(宗)。室町・安土桃山時代(14~17C)の南蛮医術のポルトガル、スペインと中国(明)を經由して江戸時代(17~19C)には紅毛医学・蘭医学のオランダと中国(明,清)から医学知識を習う。幕末からの欧米外国人医師を経て明治時代はドイツ、戦後はアメリカから医学を学ぶ。そして現在、病院経営に関しては韓国の病院から多くを学んでいる。

日本の医療史の中で、日本人よりもずっと真剣に、日本の医療に対する使命感と情熱を持って、日本人が考え付きもしなかった病院、または病院システムをこの国に導入、設置してくれた外国人医師がいた。①アルメイダ(ポルトガル人、室町時代、西洋式病院の開設)、②ポンペ(オランダ人、幕末、本格的西洋式病院の開設)、③ウィリス(イギリス人、幕末・明治初期、外科手術を披露)、④サムス(アメリカ人、終戦後、病院の近代化)の4人である。彼らは日本の病院の恩人であり、病院史における偉人と評価できる。

○通史編纂から見えてきた日本の病院の特徴

通史編纂を通じて、日本の病院独特の特長が浮き彫りされてた。主なものを6つ列挙する。いずれも日本という土壌での時間の流れの中から形成されている。①日本の病院は大きな外来部門を持ち、入院&外来のハイブリッド型スタイルをとる。②民間病院数が多い。③公的病院（日赤病院，済生会病院等）という病院群があり，その医業収益は国立病院機構に並ぶ。④アジア各国で見られる2,000～4,000床クラスの大規模病院の登場がない（戦時中の小倉，東京第三，大阪，名古屋第二の陸軍病院は例外）。⑤病院の宗教との関わりが微々である。⑥赤十字社が「病院」を保有・運営しており（稀有），それも大規模である。